

国

語

二〇二一年度

東京純心女子中学校入学試験問題

(二日午後 特待生選抜を兼ねる)

- 一. 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 二. 記述問題で字数制限のある場合は、  
句読点・記号も一字として数えなさい。
- 三. 問題文は上下二段になっています。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

プロテニスプレイヤーを目指していた君島宝良は、高校二年生の秋、交通事故に遭い、下半身マヒとなり、以後、車いすでの生活となった。テニスができなくなり、絶望する宝良。親友の山路百花は、宝良の力になりたい一心で、テレビで知った車いすテニスを勧めるが、一般のテニスとは大きく違う車いすテニスを宝良は受け入れられない。一ヶ月半前からは、百花の存在すらも拒絶するようになってしまった。

春休みは無気力にすごした。宝良がすでに退院して自宅からリハビリに通っていることは紗栄子から聞いていたが、連絡もしなかったし手紙も書かなかった。宝良に関わることをやめてしまえば思いのほか楽で、①過ぎゆく毎日は紙切れのように軽かった。何かの拍子に吹き飛んでしまっても、たぶんかなしくも悔しくもない。

『では、今日のゲストをご紹介します。車いすテニス選手の七條玲さんです』  
世界で一番だめな生き物のようにソファに寝っ転がってガムを噛んでいた、ある日。百花は点けっぱなしのテレビに登場した車いすの少女を見て、思わず起き上がった。

『では、まず車いすテニスについて説明しましょう。車いすテニスというのですね、その名のとおりに車いすに乗ってプレーするテニスなん

すが……』

情報番組の司会を務める男性タレントが、ありきたりな説明を続ける間、車いすに腰かけた少女はずっと楽しげな笑みを画面のこちら側に向けていた。なんだか見ているほうまで浮き立つ気持ちになるような笑顔。日常用車いすに身体をあずけた姿はネットで見た試合の動画よりもずっと小柄で華奢な印象だ。こんな可憐な人が、手裏剣みたいなスピードでコート駆け抜け、次々とコートに球を打ちこんで対戦者を圧倒していた、あの選手なんだろうか？

(中略)

『車いすでテニスをするというのは、いわゆる普通のテニスとはだいぶ勝手が違いますよね。どんなトレーニングしてらっしゃるんですか？』  
『体幹を鍛えるトレーニングとやっぱりと腕をかなり使うのでそこを鍛えるトレーニングは毎日してます。ほかにも車いすでの走り込みもしますけど、これが嫌で』

『え、嫌なんですか』  
『嫌です。トレーニングは全部きついし、楽しくないです。でも勝つためにはやっぱり必要なので。わたし、試合が好きなんです。戦って、勝つのが好きなんです』

②はっとして百花はクッションを抱きしめる腕に力をこめた。  
試合。

学校の部活動。あるいはテニスクラブ。テニスを生業にするアスリー

ト。どんな立場であるにせよ、テニスに真剣に打ちこむ人々が、日々の  
厳しいトレーニングと練習を積み重ねるのは何のためだ？

試合のためだ。テニスで戦い、勝利をつかむために、自分の肉体を鍛  
え技術を磨く。

『あんなの、テニスじゃない』

宝良がやったという車いすテニスは、どんなものだったのだろう。

状況はわからないが、リハビリの時にやらされた、と宝良は言っ  
た。

(中略)

それに、宝良は『試合』を知っているのだろうか？

車いすテニスを生活の中心に据えて毎日自分を鍛え、世界の頂点をか  
けて戦うようなアスリートの試合を、宝良は見ることがあるのだろう  
か。

(中略)

番組がCMに切り替わるのと同時に百花は二階の自分の部屋へ走っ  
た。机の鍵付きの引き出しから預金通帳を取り出して「いち、じゅう、  
ひやく、せん、……」と残高を数えたあと、通帳をくたびれたジャージ  
のポケットにつっこんで階段を駆けおりた。「何事なの!？」と音に驚  
いて夕食の準備をしていた母が顔を出したが、百花は猛ダッシュで外に  
飛び出し、玄関前に停めていた自転車にまたがった。

宝良の自宅までは自転車です十分ほどの距離だ。以前には休日にも何度か

遊びに行ったこともあったが、宝良が前年の十月に事故にあつて以来、  
もう半年近く訪れていなかった。事故後は宝良が入院している病院まで  
会いに行くばかりだったし、宝良に決定的に拒絶されてからはその見舞  
いさえやめてしまった。

しかしそんなブランクや絶交寸前の友情のこともこの時は頭から蹴  
り出して、百花は君島家に到着するなり呼び鈴を連打した。(中略)

「おばさん、こんばんは。たーちゃんは？」

「宝良なら、二階の部屋に……」

百花は紗栄子がい終る前に「おじやまします」と頭を下げて、靴  
を脱いで玄関から上がりこんだ。(中略)

「たーちゃん、百花だよ。ここ開けて、話があるの」

車いすでも開閉しやすいスライド式に取り換えられた宝良の部屋  
のドアを、百花はノックした。ドアの向こうでかすかに物音が聞こえたが、  
返事はない。しかし③返事がないことは想定のうちだったので百花は動  
じなかつた。

「たーちゃん、開けて」「開けてくれないと騒ぐから」「ノックしなが  
ら歌っちゃうから」「十二時間くらいなら余裕でノックしまくるか  
ら!」とドアを叩き続けること二分余り、鍵が開けられる音がした。ス  
ライド式のドアがすばらしい勢いで開いた。

「いい加減にしてよ!」

震えあがるような眼光でにらみつける宝良は、百花と同じようにジャ

ージにトレーナーを着てパーカーをはおっていた。約一カ月半ぶりに会う宝良との目線の違いに衝撃を受けた。車いすに乗った相手の顔は、こんなにも低い位置にあるのか。

でも宝良はやはり宝良だった。にらまれるとa身体がすくむような眼光はそのままだ。その眼光に負けないように百花は腹に力をこめて、ジャージのポケットから出した預金通帳を宝良の鼻先に突きつけた。さすがの宝良もbたじろいで、車いすを引いた。

「何これ……」

「わたしの全財産。たまに使つちやうこともあったけど、小学一年生からずっとお年玉貯めてて四十万円ある。このお金で、たーちゃん、わたしと一緒に福岡に行つて。福岡の飯塚市。五月十二日の火曜日から五月十七日の日曜日まで。車いすテニスのジャパンオープン、見に行こう」

宝良は、しばらく何も言葉が出ないという顔で百花を凝視していた。たつぷり十秒は絶句したあと、ようやく口を開いた。

「……ばかなの？」

「たーちゃん、言ったよね。車いすテニスはテニスじゃないって。テニスの妥協で代用品なんだって。でもたーちゃん、車いすテニスの試合、ちゃんと見たことあるの？」

宝良は答えず、唇を引き結んだ。④やつぱり、そうなのだ。百花は預金通帳を突き出したまま続けた。

「確かに車いすテニスと、テニスは別の競技だよ。わたしたちがやって

きたテニスとは全然違う。だって車いすで走るんだもん。車いすで走りながら球を打つんだもん。それで相手に勝たなきゃいけないんだもん。すつごく難しい、高度な競技なんだよ。ねえ、たーちゃん。車いすテニスはやったことあるって言ったよね。やらされた、って。でもそれ、違うから。確かに車いすテニスだったかもしれないけど、たーちゃんがやったことってレベル1くらいのことですよ。ううん、レベル0・3かも。その程度で車いすテニスを知った気になつちやつてるの、どうなの？」

内心ガチガチに緊張しながら、百花は挑戦的に口角を吊り上げた。

宝良の目に、ゆらつと炎が燃えるように鋭い光がともった。

そう、この目だ。戦うことに血を沸きたたせる宝良の目だ。

「だから本当の車いすテニス、たーちゃんに見せてあげるよ。飯塚のジャパンオープン、見に行こう。日本どこるかアジア最高の大会なんだよ。世界中のすごい選手が集まって戦うんだよ。」

「ばかなの？ 福岡って九州じゃない。そんなところに行けるわけない」

「行けるよ。羽田空港から福岡空港まで飛行機で行つて、福岡空港から新飯塚まで高速バスで行けば、あとはタクシーでちよちよいのちよいだよ。ちゃんと調べたもんね」

「——だから！ モモは行けるよ、自分の足で九州でも沖縄でも北海道でもシベリアでも行けばいい！ でも私は、こんだから、九州なんて遠いところ行けるわけない！」

「行きなさい、宝良」

凜とした、と形容するにはやや鋭い声が響いて百花は驚いた。

いつの間にか二階に上がってきていた紗栄子は、まっすぐに歩いてきて百花のかたわらに立ち止まると、娘を見つめた。

(紗栄子に説得されて、宝良は福岡に試合観戦に行くことにし、百花の両親に許可をもらうため、百花の家に向かう。百花の両親からはすぐに許可

が下り、宝良たち親子は帰宅するために車に乗りこもうとしている。)

「……たーちゃん、無理やりごめんね。でも、どうしてもわたし、たーちゃんと本物の車いすテニスの試合を見たい」

紗栄子と宝良が帰る頃には、もう⑤夜空に無数の小さな光の粒がかがやいていた。

スロープから車に乗りこもうとしていた宝良は、百花が小さな声で謝ると、車いすのハンドリムから手を放して息をついた。

「試合なら見たよ。モモに車いすテニスしないかって言われた日から何度も。三國智司とか、ベルナル・デュリスとか、ヨハンナ・フィンセントとか、七條玲とか」

——そう、先ほど紗栄子が話していた。宝良はパソコンで車いすテニスの試合をいくつも見ていた、と。

「……どうだった？」

二秒おいて、すごかった、と返った声は小さな雨粒みたいだった。

「車いすの動きがあんまり速くて、なめらかで、地面を走ってるんじゃない。氷の上を滑ってるみたいだった。あの人たち、コートにいる間はぼっぴり止まらないんだよ。人の字みたいに動きながらずっと走ってる。車いすって一回停止すると動き出す時にすごく力があるし、スピードが出るまでに時間もかかるから。(中略)……あんなプレー、私には無理。車いすになってから、行きたい場所に行くまでに信じられないくらい時間がかかる。走ろうとしてもすぐに腕が痛くて動かなくなる。車いすを動かすだけで精いっぱいなのに、その上テニスなんてできると思えない。でもテニスを取ったら、自分に何が残るのかわかんない。テニスができない自分が自分って言えるのかもわかんない。わかるのはテニスしてないと苦しいってことだけ。それ以外は本当にわかんないの、全然、何も

——  
声が震えた瞬間、宝良はきつく唇を噛みしめた。宝良は、人前で涙をこぼすことはおろか、声を震わせることすら自分にゆるさない。

そんな融通がきかなくて頑固で誇り高い宝良が、大好きだった。そして今ここで車いすに座っている宝良も同じだ。素直じゃなくて意地っ張り、こんな時くらいは弱音を吐いてもいいだろうに、やっぱり

そうはできないほど誇り高い。

宝良は宝良だ。宝良のまま。何が起きても、これからどんな道を選ぶとしても。

「……ちよつと。なんでモモが泣いてるの?」

「たーちゃん……大好きだから、ジャパンオープン、一緒に行こう……」

「何それ、全然文脈つながってない……」

「わたしも、わかんない。ずっとわかんなかった。たーちゃんの役に立ちたいって思ってるのに、わたしに何ができるのかわかんなくて、元氣の出ること何か言いたいけど、わたしは何もわかってなくて変なこと言っ  
て傷つけちゃうんじゃないかって思うと怖くて。今でもわかんない。何もわかんないの。だから、とにかく一緒に行こう。アジアで一番すごい大会見て、やつぱり無理って思ったら、車いすテニス、しなくていいから。それでもたーちゃんはたーちゃんだから。テニスしてたって、しなくてたつて、たーちゃんはわたしのヒーローだから」

「……モモ、泣くのやめてよ。鼻水たれてる」

「何かわかるかもしれないし、何にもわかんないかもしれないけど、行こう一緒に——」

のちに宝良はこの時の百花の顔を「ぐしやぐしやのびしやびしや」と形容するのだが、そのぐしやぐしやでびしやびしやの顔にさしもの宝良も恐れをなしたらしく、わかった、行くよ、行くから、と幼児の機嫌をとるように言った。百花は駄々っ子のように泣きながら、行こう、行こうね、一緒に、とくり返した。

テニスをして、しなくても、自分の足で走っても、車いすで走っても、宝良は宝良だ。宝良が宝良であってくればそれでいい。それだけ

でいい。

けれど、願わくば、見つけてほしい。

これからの人生を照らす、光を。

(阿部暁子『パラ・スター〈Side 百花〉』より)

なお、本文中には省略があります。

\*1 紗栄子……君島紗栄子。宝良の母。

\*2 生業……生活をしていくための仕事。

\*3 ブランク……一時離れている期間。

\*4 さしもの……さすかの

問一 ——線①「過ぎゆく毎日は紙切れのように軽かった」とあります

が、どのようなことをたとえているのですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日ごとに気持ちが軽くなり、気楽に過ごせたということ。

イ 毎日がなんとなく過ぎ、充実感を得られなかったということ。

ウ 日々の生活で忙しく、あつという間に過ぎてしまったということ。

エ 気持ちがふさぐ日が続く、何もやる気にならなかったということ。

問二 ——線②「はつとして百花はクッションを抱きしめる腕に力をこ

めた」とありますが、百花はなぜ「はつと」したのですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 宝良も、自分の肉体をきたえることが嫌いだということを思い出したから。

イ テレビに映る小柄で華奢な七條選手の姿を観て、意外だと思ったから。

ウ 宝良は試合をして勝つことが好きなのだということに、改めて気づいたから。

エ 七條選手がトレーニング嫌いだということを知って、親しみを感じたから。

問三 —— 線③「返事がないことは、百花は動じなかった」とありますが、なぜ「動じなかった」のですか。次の文の【1】・【2】に入る言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

百花は、宝良に【1 二字】され、二人は【2 四字】の状態でたつたから。

問四 —— 線 a 「身体がすくむ」・ b 「たじろいで」の意味として適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「身体がすくむ」

ア 緊張のあまり、体がこわばって動かなくなる。

イ 恐怖のあまり、体に痛みを感じてくる。

ウ 怒りのあまり、体の震えが止まらなくなる。

エ 悲しみのあまり、体に力が入らなくなる。

b 「たじろいで」

ア 突然のことに驚いて

イ 意外なことに怪しんで

ウ 気持ちに気がついて

エ 勢いに押されて

問五 —— 線④「やっぱり、そうなのだ」とありますが、「そう」の指す内容を本文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線⑤「夜空に無数の小さな光の粒がかがやいていた」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「小さな光の粒」とは、何のことですか。答えなさい。

(2) この情景描写が暗示していることとして適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紗栄子と宝良の関係が、良い方向に進み始めたということ。

イ 宝良が、閉ざしていた心をようやく開き始めたということ。

ウ 百花と宝良の友情が、壊れ始めているということ。

エ 宝良が、これからの車いすテニス界を背負っていくということ。

問七 次の会話は本文について、二人の中学生が話している場面です。

【1】〜【8】に入る言葉を本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

A子…宝良はプロを目指すようなすごい選手だったから、テニスができなくなつてたくさん悩んだんだろうね。

B美…【1 二十字】もわからないつて言うくらい悩んだのに、そんな時も弱音を吐けないほど【2 四字】んだね、宝良は。

A子…百花に車いすテニスを提案されたとき、宝良は車いすテニスを【3 十字】だつて言つて、認めてなかつたんだよね。

B美…でも、その後パソコンで試合をいくつも見て、そのすごさに気づいた。

A子…それなのに、言い出せなかつたのはどうしてだろう。

B美…【4 十二字】な性格のせいかな。

A子…自信がなかつたつていうのもあるんじゃないかな。プロの選手はまるで氷の上を滑つてるみたいになめらかで、【5 十二字】ずつと走つてるのに、今の宝良は【6 十五字】だから、車いすテニスなんて到底無理つて思ったのかも。

B美…でも、百花は、「テニスをしているかどうかは関係ない、【7 六字】」つて。これつて宝良の存在そのものを大切に思つているつていうことだよな。

A子…そうだね。それにしても、人前で涙を流さない宝良と【8 十三字】つて形容されるくらい泣き虫な百花とが、対照的に描かれてるのがおもしろいね。

B美…対照的な二人だからこそ、お互いに支え合つていけるのかもね。



□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

若い人たちは「運命」という言葉が好きだ。運命の恋人、運命の教師、運命の仕事……。そんなものにはなかなか巡りあえないとわかっているからこそ、「これって運命かもしれない」とすぐに口にするのかもしれない。

①この「運命」は、上の世代が使う「運命」とはかなり違っているようだ。哲学者の木田元氏は、著書『偶然性と運命』（岩波新書、二〇〇一年）でゲーテが恋人にあてた詩の一節を紹介している。

おお、なれこそは前の世に

わが妹にありしや、妻にありしや

あなたとは現世だけではなく前世から続いていた仲だったのだ、と述べるゲーテ。恋人といるだけでこれほどの強い歓びや生の実感に充たされたらさぞ幸せだと思われるが、知人の若者にこの話をしたら「重すぎる」と苦笑していた。

□ 若い人は、「運命」という言葉をもう少し軽く「偶然」と同じ意味で使っている可能性もある。自分から積極的に望んだのではなく、受け身で待っていて偶然にやって来たようなものを「運命」と呼んでいるのだ。

とはいえ、ただ「偶然を待っているだけ」というのではあまりに②消極的な感じがするからか、最近は「偶然、望んでいたようなことが起きた」というのを「『引き寄せの法則』が働いた」と表現する若い人も多い。

この「引き寄せの法則」は、二〇〇七年に翻訳が刊行されたロンダ・バーン氏の『ザ・シークレット』（山川紘矢、山川亜希子、佐野美代子訳、角川書店）という自己啓発書に書かれた教えがもとになっているようだ。最近では人気モデルやタレントも「私は『引き寄せの法則』を実践してこうなった」などと言っていて、「誰が最初に言い出したか」は問われなくなっているようだ。

この「引き寄せの法則」の基本は「強く願えば現実になる」ということで、「すべての答えや真理は私の中にもうあるのだ」と考えて、それを言葉にして願うことが偶然を起こし、運を開くというのだ。

この法則を実践して幸せになった、というあるタレントはこう語っている。

「予約が取りにくい人気のスパに電話をするときは、すでに予約が実現しているのをイメージするんです。すると、『たったいまキャンセルが出ました』とすんなり予約が取れることも多いのです」

つまり、最初から「ダメだ、どうせ予約が取れない」と思っているとそうなってしまうが、「私は絶対にこのスパに行くんだ。いえ、行けることはもう決まっている」と具体的に願うと、本当にそれが実現する。これが「引き寄せの法則」だということのようだ。【ア】

上の世代からすると、「そんなにうまくいくわけじゃないか」と笑いたくなくなってしまふのだが、学生の中にはこれを本気で信じており、この法則を実践しているタレントの本をAシユクドクして、彼女のすすめに従って自分の願いをノートに書き出したりしている人もいる。また、学食で「今日のサービスマニュー」などを目にして、「やったー！ パスタが食べたいな、と何となく思っていたらBハンガクだって。これって『引き寄せの法則』だよな」と無邪気に喜んでる人もいる。【イ】

そんなひとりに、「いや、それほど大げさなものじゃなくて、単にある一定のCカクリツであなたがうれいと思うことが起きる、ってことでしょうか？ だって、一週間のほかの曜日はあなたが望んでいないメニューがサービスの対象だったわけだし」と言って、「そんな風に科学的に考えて、何か楽しいことでもあるんですか？」といわゆる「逆ギレ」されたこともあった。【ウ】

それよりも、「とにかくこれを実践して成功した人もいる」とひとつでも成功例があるだけで、「やらないよりはやったほうがいいかも」と信用してしまうのだ。そして、自分には幸せなことが起こらなかったとしても、ひとりですっと「私の引き寄せ方が悪かったのね」とあきらめ、誰を恨むこともないのだろう。

□ いまの若い人たちは、一定のカクリツで起きる偶然のことまでを「運命」と呼んだり「引き寄せの法則」と呼んだりして、「私にもこんなハッピーなことが起きた！」と思わなければとてもやっていけない

ほど、自分の努力や能力で幸せをつかむのはむずかしい、ということを知っているのかもしれない。【エ】

また、a万が「望んだような幸せが何も起きなかったときのために、「そういう運命ということか」「『引き寄せの法則』はいまじゃないつか、働くに違いない」といった逃げ道を用意しているのかもしれない。だとしたら、これは彼らのサバイバルのための知恵であり、あなたが「どうしてそんなb非科学的なことを信じるの？ そんなヒマがあったら、なりたいたい自分に向けて自分で動いたほうがいいんじゃない」と無責任に言うことはできないだろう。

≡、すべてを「引き寄せの法則」にまかせて、ひたすら心にあることをイメージしたり書き出したりして待っているだけ、というのも寂しい話だ。

上の世代としては、「引き寄せ」ではなくこちらからも「近づいて行く」ということのDコウヨウを若い人たちに伝えるべきだが、最近はその経営者などもこぞって「引き寄せの法則」の本を読みあさっているのだという。

完全に「待つしかない」「願うしかない」という社会になってしまふ前に、③「イメージするだけじゃ引き寄せられないよ」と口にしてこの法則と対決しなければならぬときもある、というのもまた「運命」なのではないだろうか。

（香山リカ『若者のホンネ 平成生まれは何を考えているのか』より）

\*1 ゲーテ……ドイツの詩人・小説家・劇作家。一七四九年～一八三二年。

\*2 なれ……あなた

\*3 わが妹にありしや……わたしの妹であったのか、妻であったのか

\*4 自己啓発書……読む人にとって自身の能力向上や精神的な成長を目指すための参考となるよう書かれた書物。

\*5 スパ……温泉。また、それを中心としたリラクゼーション施設。

\*6 逆ギレ……怒られている側の人が、カッとなって急におこり出すこと。

\*7 サバイバル……困難な状況を切りぬけて生きのびること。

問一 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに入る言葉として適当なものを、次の

ア エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ とはいえ

ウ おそらく エ もしかすると

問二 ——線①「この『運命』は、違っていているようだ」とありますが、

ここで筆者は、若い人と上の世代の人々との「運命」観の違いについて語っています。次の各問いに答えなさい。

(1) 「上の世代が使う『運命』」は、本文ではどのように説明されていますか。二十文字以内で答えなさい。

(2) 若い人は「運命」をどのようなものとしてとらえていますか。本文中から二十文字程度で探し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問三 ——線②「消極的」の対義語を本文中から抜き出しなさい。

問四 次の一文は本文中の【ア】・【イ】・【ウ】・【エ】のどこに入るのが適当ですか。記号で答えなさい。

つまり彼女たちは、「引き寄せの法則」が科学的に真実なのか、証明可能な法則なのかといったことはあまり気にしていない。

問五 ——線a「万が一」の意味として適当なものを、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ごくまれに イ 残念なことに

ウ 絶対に エ うれしいことに

問六 ——線b「非科学的」の「非」と同じ漢字を使うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母は私の意見を絶対にヒテイしない。

イ 彼は私の行動をヒナンした。

ウ 彼女の父親は有名なヒョウ家だ。

エ 私の祖父は長年のヒガンを達成した。

問七 ——線③「『イメージするだけじゃくならないときもある』とありますが、筆者は「この法則と対決」するにはどのようなしたらよいと考えていますか。説明しなさい。

問八 次の会話は「引き寄せの法則」について三人の中学生が話している場面です。これを読んで、後の各問いに答えなさい。

A：「引き寄せの法則」って最近流行<sup>はや</sup>っているんだってね。どういう法則なの？

B：基本は【1】ということらしいよ。

C：そうそう、例えば、私がとってもほしい服があったとして、それを「ほしい、ほしい」って強く願うと手に入るっていう話ね。

B：「病は【2】から」っていうことわざにもあるけど、病気になるっても、「私は絶対に治る」って信じる人は、「もうだめだ」と思う人よりも病気に強いって、よく聞くよね。

A：なるほど。私も授業中に先生に当てられないようにつてすぐく念じていた時に限って、当たることつてあるんだよね。これも引き寄せの法則か……。

C：どうせなら、いっぱい、いいものを引き寄せたいよね！

(1) 【1】に入る適当な言葉を本文中から十字で抜き出さなさい。

(2) 【2】に入る漢字一字を答えなさい。

(3) A・B・Cさんがあげている「引き寄せの法則」の例のうち、**当てはまらないもの**が一つあります。誰のものか、A・B・Cの記号で答えなさい。

問九 次のア～オについて、本文の内容として正しいものには○を、そうでないものには×を記しなさい。

ア すべての答えや真理は自分の手の届かないところにあるため、ひたすら願うことで偶然は起き、運が開けることを「引き寄せの法則」という。

イ 今の若い人たちが偶然に起こることまで「運命」と呼ぶのは、自分の努力や能力のおかげで幸せを呼び寄せているのだとわかっているからだ。

ウ 今の若い人たちが「引き寄せの法則」を信じるのは、努力しても幸せな出来事が起こらなかったときに、言いわけをするためである。

エ 会社の経営者たちは、「引き寄せの法則」は不確かなものだから、幸せには自分から近づいていくべきだと若い人たちにすすめている。  
オ 若い人たちが考える「引き寄せの法則」がそのまま広がっていけば、完全に「待つこと」「願うこと」ばかりを求める社会になってしまう。

問十 ……線A「ジユクドク」・B「ハンガク」・C「カクリツ」・D

「コウヨウ」のカタカナを漢字に直しなさい。